

青年教師・廣池千九郎の教育思想

江島 顕 一

廣池千九郎は、その社会的キャリアを小学校の教師としてスタートさせた。時は遡ることおよそ140年前、1872(明治5)年の「学制」の発布によってわが国の近代学校教育が緒に就いたばかりであった。

廣池は、1879(明治12)年に郷里の大分県中津市内に設立されて間もない永添小学校を卒業し、続いて1880(明治13)年に同郷の福澤諭吉が慶應義塾の分校として設立した中津市学校で修学を終え、同年に弱冠14歳にして母校の永添小学校に助教として着任した。そこで若輩ながらも校務を掌る中心的な存在として職務にあたった。しかし、正規の教員免許を持っていなかったことから、1883(明治16)年に師範学校への進学を目指してその職を辞し、大分市内にあった麗澤館に入塾した。小川含章のもとで勉学に励み、二度の受験失敗を経ながらも、「応請試業」に合格し、師範学校卒業の資格を得たのであった。小川との出会いが、その後の廣池の人生に大きな影響を与え続けたことは、晩年に自らの住まいを麗澤館と名付けたことが何よりも雄弁に物語っている。

1885(明治18)年に正規教員として赴任した形田小学校では、地域の教育の改善に向けて、とりわけ様々な事情から就学が困難な児童を対象に、子守学校の実施を試みつつ、巡回教授の方法をとった夜間学校を開設するに至る。また、大分県共立教育会に入会し、講習会への参加や機関誌への寄稿を通じて県内の教育の向上に参画していく。この時期、大分県を含めた全国的な経済不況から、受益者負担の原則による授業料などの教育費は、国民にとって重い負担となっており、小学校の就学率は停滞していた。こうした社会背景の中で、教育の機会を得ることができない児童の救済について廣池は、「ペスタロッチに倣う」と題し、人間性の陶冶を目指し、貧児や孤児に教育と仕事を授けようとしたペスタロッチに倣おうとする気概を記している。

1886(明治19)年には「小学校令」が公布され、初等教育は尋常小学校の4年間を義務教育と定めるなど、一層整備されていくこととなる。そうした中で『大分県共立教育雑誌』に廣池の「学校生徒実業ヲ重ズル習慣ヲ養成スル方案」(1886年)が掲載され、「学文ハ教員官吏トナルノ階梯ニ非スシテ実業ヲ助ケ世ノ幸福

ヲ維持増進スルノ品物タルコトノ理ヲ示スコト」と、学問は自らの立身出世のためではなく、実際の実業に寄与して社会に貢献するためのものであることを強調した。

1887(明治20)年には万田尋常小学校に転任し、地域への教育の普及が困難な状況を「万田学校難状記」(1888年)として記しながらも、現状打開に向けて、教師自らも実業に精通しているべきとの立場から、中津の地場産業のひとつであった養蚕に関する「蚕業新説製種要論」(1887年)を、国家の道德教育の方針が確立しない中、その推進を図るテキストの作成を試みた「改正新案小学修身口授書」(1887年)を、これまで試行してきた夜間学校に関する立論を体系的にまとめた「遠郷僻地夜間学校教育法」(1888年)をそれぞれ脱稿している。また、再び『大分県共立教育雑誌』に廣池の「小学校教員ハ勉メテ偏頗ノ行ヲ去ルベシ」(1888年)が掲載され、教師は児童の鏡であるとして、特定の政党や宗教に偏向することなく、常に中正が要求される存在であることを主張した。

1888(明治21)年には中津高等小学校に栄転し、学校教育の充実を図るべく、遠方ゆえに通学が困難な児童のための寄宿舎の設置、児童の身体の器官の発達や将来の職業の選択を見据えた手工科の設置などに同僚と取り組む。また、大分県共立教育会において、教師の待遇改善や生活保障を提言した「大分県教員互助会設立の主意書」及び「大分県教員互助会概則」(1889年)が掲載され、これが契機となって後に制度化された。当時の大分県内の教師の身分や福利は十分に保障されておらず、志望者の減少や転職する現職者の増加が問題となっており、その解決と教育の質保証に向けて自ら立ち上がったのであった。

さらに、道德教育のテキストとして『新編小学修身用書』全3巻(1888年)を刊行した。廣池にとって最初の公刊物であった「此書ハ生徒ヲシテ首ニ国民ノ具有スベキ貴重ナル氣質ヲ涵養セシメ次ニ実業ト学文トヲ兼ネ愛スルノ念ヲ養成セン」との目的から編纂された。各巻には50の格言が掲げられ、学問や孝行、公益や地域貢献、実業の発展などの内容を、それらに努めた市井の人物の事蹟を取り上げる形で構成された。1890(明治23)年の「教育勸語」の渙発を前にして、

地域の特殊性と道徳の普遍性を併せ持った独特のテキストといえるものであった。

また、わが国の歴史を記憶し易いよう歌にし、児童に忠君愛国の念を涵養することを企図した『小学歴史歌』(1889年)を刊行した。こうした歴史教育への関心の傾斜は、郷土の歴史や文化に対する理解とその継承を促進し、郷土愛を喚起することをねらいとした『中津歴史』(1891年)の執筆に結びついた。類書をみなかった本書は、地方史研究の嚆矢として内外に認められ、後のキャリアに大きな意味を持つことになった。

このように青年教師・廣池千九郎は、多岐にわたる教育、研究活動を展開した。それらは明治の教育の歴史的な動向や情勢というものを踏まえ、時にはそれに先んじたものもあった。同時に、大分の中津という地域的な実情や特性に適したものでもあった。換言すれば、廣池は出発したばかりの近代学校教育の普及や拡充に一地方の一教師として、一心に情熱を傾けて取り組んだのであった。このように廣池を突き動かしたのは、地元の教育改革を行っていく過程で目の当たりにした、貧困にあえぎ、教育の機会を失い、そうした窮状から脱却することが非常に困難な農村地域の子どもの姿であった。明治という新たな時代を迎えた中で、子どもたちに自らの将来を自らで切り拓いていける実力を身に付けさせようとしたのである。その志の源泉には、強い使命感と深い教育愛があったといえよう。

しかし、廣池は教育と研究に邁進する中、次第に歴史家という新たな志を抱くようになる。そして、1892(明治25)年にその実現に向けて、妻の春子とともに京都へ出立した。12年間にわたる教員生活に区切りをつけたこの時、26歳であり、わが国は大日本帝国憲法の施行を経て、明治が折り返しに入る時であった。

廣池が生まれてから故郷を後にするまでのいわゆる「中津時代」は、廣池の生涯にとって教育に直接従事した時期に該当するばかりでなく、最初期の思想形成の時期でもあった。それゆえ、後年に『道徳科学の論文』(1928年)として結実し、「モラロジー」の提唱へと至る思想を考察する上で非常に重要な時期である。その意味で、「中津時代」の研究は、生誕150年を迎えた今日、廣池の生涯を通じての教育思想を捉え返すとともに、わが国の近代学校教育の成立過程を振り返る上でも、再考に値するのである。

本稿の内容の詳細については、以下を参照されたい。

- ・拙稿「廣池千九郎の道徳教育論に関する一考察—中津・下毛における教員時代に焦点を当てて—」(『道徳と教育』第329号、日本道徳教育学会、2011年)
- ・拙稿「廣池千九郎の教育思想—「中津時代」に焦点を当てて—」(『モラロジー研究』第72号、道徳科学研究センター、2014年)
- ・拙稿「青年教師・廣池千九郎の思想と実践」(公益財団法人モラロジー研究所、2016年)